高等学校

平成8年度

教育研究員研究報告書

国語

東京都教育委員会

平成８年度

≪国語≫

教育研究員名簿

学区	学校名	氏名
1	都立南高等学校	西村伸二
2	都立国際高等学校	加藤昌美
4	都立池袋商業高等学校	元木孝子
5	都立白鷗高等学校	保戸塚朗
5	都立淵江高等学校	田村幸司
6	都立小岩高等学校	六谷明美
6	都立葛西南高等学校	岡﨑俊彦
6	都立向島商業高等学校	近藤直子
7	都立八王子東高等学校	小林洋
8	都立武蔵村山高等学校	真鍋香
8	都立秋留台高等学校	加藤兆
9	都立田無工業高等学校	江口由季子

担当

教育庁指導部高等学校教育指導課　主任指導主事　大澤充二

指導主事　菅沢茂

研究主題

言語文化への関心を深め，自己を確立する態度を育てる指導の在り方

目　　次

Ⅰ　主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　主題解明の方法 …… 3

Ⅲ　指導の実際 …… 4

1　「話し言葉」を見つめ直し，自己を確立する態度を育てる現代語指導の工夫 …… 4

2　言語がもつ「力」に注目し，言語文化への関心を深め，自己を確立する態度を育てる古典指導の工夫 …… 10

3　現代小説を読み，自己を確立する態度を育てる現代文指導の工夫 …… 17

Ⅳ　まとめと今後の課題 …… 24

［言語文化への関心を深め，自己を確立する態度を育てる指導の在り方について］

Ⅰ　主題設定の理由

21世紀の到来を目前にした今日，社会全体が様々な面で急激な変化を遂げようとしている。しかも，その変化は今後ますます加速されていくようにさえ思われる。例えば，情報化の波はコンピュータやファクシミリ，携帯電話などの急速な普及により日常生活に大きな変化をもたらしている。また，インターネットの発達は，国内で生活する場合でも，異なる文化圏の人々と接触する機会を著しく増大させている。このように今日の社会は様々な要素が絡み合い，極めて複雑な様相を呈している。こうした変化の激しい，先行き不透明な時代にあって，長期の展望に立ち，時代に即応した教育を構築することは，学校教育の重要な課題である。

今日の高校生は異なる文化を受け入れる思考の柔軟さや感性の豊かさ，センスの良さやスマートさなどの点で優れている。しかし，その一方で社会性の不足や自立の遅れなどの問題点も指摘されている。言語能力に関しても，語彙の乏しさが目立ち，理解力もさることながら，特に表現力の不足が目立つ。そして，このことが精神面の幼さにもつながっていると考えられる。

言語は文化の一部であるが，同時に文化の中でも特別に重要な地位を占めている。人は言語を抜きにしては豊かな人格形成を成し遂げることはできない。それゆえ，言語の教育としての国語教育の果たすべき役割は極めて大きいと言える。しかし，従来の国語教育はその役割を十分に果たしてきたとは言い難いように思われる。改めて言うまでもなく，言語能力は表現力と理解力の二領域からなるが，これまでの国語教育は，表現力の大切さが繰り返し強調されてきたにもかかわらず，えてして理解力の育成に偏りがちであった。今後の国語教育においては表現，理解及び言語事項を，相互に有機的に結び付け，まとまった形で指導することにより，総合的な言語能力を身に付けさせることが大切である。

先に出された第15期中央教育審議会の第一次答申においても，これからの子供たちに必要となるのは，いかに社会が変化しようと，自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力であり，また自らを律しつつ，他人を思いやる心や感動する心など，豊かな人間性であるとし，こうした資質や能力を［生きる力］と呼んでいる。

以上のような観点に立って上記の研究主題を設定した。「言語文化への関心を深め」とは，生徒が言語そのものと言語によって創造された文化に目を向け，その大切さと素晴らしさを理解することであり，「自己を確立する」とは，生徒自身が言語活動を通じて自己を発見し，自らの個性を伸ばし，主体的に生きていくことができるようになることである。そのためには教材を精選するとともに授業展開を改善することにより，国語の授業を真に魅力あるものとし，生徒一人一人が意欲的に学習に取り組めるようにすることが大切であると考えた。

具体的には，教科書以外からも積極的に学習素材を取り入れた。また，従来からの教材についても新しい視点からとらえなおすとともに，グループ学習などを大幅に増やすなど，授業形態を工夫し，生徒が授業の中で主体的に問題を見つけ出し，自ら考え，発表するようにした。さらに，他の生徒の意見にも耳を傾けることによって，自らの考えを深化させることを目指した。また，音声言語に目を向けさせることにより，言語の特性を理解できるようにした。そして，これらを通じて今後の生涯学習社会の中で，常に自ら学びながら生きていくための基礎と

なる能力を高校生の時に身に付けさせることを意図したものである。

Ⅱ　主題解明の方法

標記の主題及び授業実践の意図を実現するため，今年度の研究員は現代語・古典・現代文の3班に分かれ研究を進めた。その際，教材選定に配慮するとともに，授業の流れを理解しやすいものとし，授業のイメージ化に役立てるため，指導計画の形式を各班ごとに検討し，工夫をこらした。

「現代語班」は，書き言葉中心の国語教育を見直そうと，あえて話し言葉にのみ焦点を当て，その特質を理解させようと試みた。主題にある「言語文化」のうち「音声言語」の領域への「関心を深め」させようとするものである。その中でも，スピーチやディスカッション，ディベートなどではない，日常的な「対話」の場面を設定した。また，授業形態として，教師中心の講義形式を排し，生徒中心のグループ活動，ロール・プレイングなどの演習を多く取り入れ，受動的な授業の参加態度を改めさせ，主体的に課題に取り組ませようとした。そして，自分の立場をしっかりとらえ，場面に応じた適切な話し方を目指すことで，「自己を確立する態度」を育てようと考えた。そして，このように話すのが正しい話し方だと教えるのではなく，生徒自身が実践を繰り返すうちに，少しずつ，より良い話し方とはどんなものか，気付いていくよう導くのである。したがって，評価についても，一つ一つの演習を通して何を考えたのか，どんな工夫をしたのかという自己評価，あるいは生徒相互の評価を重視する。

「古典班」は，古文では『徒然草』の「応長の頃」を，漢文では『三国志演義』の中から「呂布と貂蝉」を教材として選んだ。古典作品を情報という新しい視点から読み進めることで，生徒たちの関心と意欲的な態度を維持しながら，情報を生み出す「言葉の力」に注目させることができると考えたからである。授業形態としては，導入部において，現代語訳を活用したプリントによる個別の学習を組織し，各自にあらすじや内容，また言語事項を理解させ，その上で，グループ学習や表現学習に取り組ませることにした。古文では「応長の頃」に登場する流言飛語の構造分析をもとに，「平成の頃」という短文を作成させた。漢文では，情報操作における巧みな言葉遣いを読みとらせ，その過程で考えたこと・学んだことをまとめさせた。内容理解に中心を置きながら，それを現代という時代を通してとらえ直す段階に表現活動を取り入れ，言葉・情報と主体的に関わる意識・姿勢を養おうと試みたのである。評価においては事中評価を重視し，プリントの回収・点検を通して，生徒との連絡・学習の深化の把握に留意した。

「現代文班」は，みずみずしい感性で現代の若者の心をとらえている山田詠美・吉本ばなな・俵万智などの女流作家に着目した。今回はその一人である山田詠美の『晩年の子供』を取り上げ，高校生の共感にもとづいた授業を展開していくことにした。具体的な方法としては，あらすじに沿って読解していくのではなく，問題点を提起し，それを解明するというやり方で授業を進める。そして，その過程で他者の様々な意見（主人公の考えも含む）と向き合わせることにより，自己を見つめ直させ，そのことを通じて「自己を確立する態度を育てる」授業実践を試みた。授業形態としては，グループ学習を取り入れ，生徒の主体的な活動と意欲を喚起することに努めた。優れた作品は様々な読みが可能である。そこからいろいろな問題を見付け出し，その解決に取り組むとともに，他者の様々な意見と向き合うことにより，「自己確立」への糸口を見出せるようにした。

Ⅲ　指導の実際

1　「話し言葉」を見つめ直し，自己を確立する態度を育てる現代語指導の工夫

1．単　　元　「話し言葉」を見つめ直す。

2．題　　材　スポーツの実況中継録音・録画・任意の図形・写真等。

3．単元の目標

① 自分の立場をしっかりととらえ，目的や場に応じた適切な話し方をしようとする態度を身に付ける。

② 他者を思いやり，他者と協調しようとする心から育まれてきた日本語の話し言葉の特質を理解する。

③ 様々な実践を通して，自ら課題を見つけ，考えたことを言葉にする力を身に付ける。

4．単元設定の理由

情報化社会の進展にともなって，コミュニケーションの方法もますます多様化してきた。ワープロで書いた手紙やパソコン通信などのキー・ボードを介しての相互伝達はもとより，「ベル友」（ポケット・ベルを介したペン・フレンドのような間柄。）などの，かつては想像も及ばなかった意思疎通の方法が高校生の間にも広まりつつある。また，国際化が進むなか，英語教育でもオーラル・コミュニケーションが重要な位置を占めるようになった。

ところが，その一方で，日本語の日常会話でうまく意思の疎通ができない生徒が増えている。かつては，痛みの表現でも「キリで揉むように」とか「腹が渋る」といった的確なものがあり，医師の問診に役立ったものだが，現代の高校生の間では死語同然になっている。また，ある新聞の投書欄には，通勤電車内での座席の譲り合いを巡って，男子高校生が老人を罵倒した言葉の事例が挙げられていて，大きな関心を呼び起こした。近年，「ことばによるいじめ」などでも，言葉は受け手の状況を想定して発せられるべきであるという。最も基本的な視点が欠落している。

このように，文明の高度化，情報機器の発達などに反比例するように，話し言葉はますます軽視され，その結果，言語は私たちの生活実感から遊離した空虚なものになろうとしている。そこで，従来の「読む」「書く」にかたよりがちな国語教育を見直すべく，あえて「話すこと」の特質に迫り，より正確で効果的な言語表現の在り方について，生徒が主体的に学習する「現代語」の授業を目指して研究に取り組んだ。

「話し言葉」の学習には，発声や滑舌訓練などの外面的要素と，自らの意思を的確に伝達するための内面的要素が挙げられるが，この単元では後者に焦点を絞り，さらに，スピーチやディベートではなく，社会生活を営む上で不可欠な日常対話を中心に演習を進めていくことにした。

また，一斉講義方式で一方的に知識を与えるという形態を避け，生徒主体のグループ活動やロールプレイングなど，生徒自身が実践を通して自ら学んでいくという方法を工夫した。

今回試みた演習は，どれも単純で容易に取り組めるものである。たしかに，これらは小・中学校でも行えるものではあるが，この研究では，高校でこれらの演習を試みながらも，あえて，指導者の言葉による「正解」を与えないよう配慮した。これは，高校時代というものが各自様々な環境で様々な経験を積み，自己の在り方・生き方を深く見つめ始める時期でもあり，これらの演習から自分なりの何かを得ることができると考えたからである。何かとは，たとえば「はっきりと発音する。」「相手の気持ちを思いやる。」といった単純なものでよい。一人ひとりが個性を活かして生きるために必要な話し方を獲得しようとする。それがこの単元の最も大きな目標である。

5．指導計画　（全学年対象・配当６時間）

第一時

学習事項

㈠音声で伝えることの難しさを実感する。

学習活動

①代表生徒が，教卓上のカード（図１）を見ながら音声だけで伝え，他の生徒はノートに書き留める。

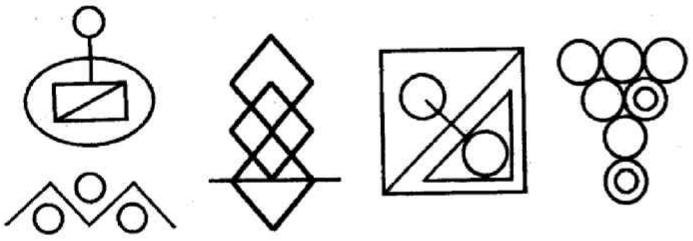


図　1

②ＶＴＲとテープレコーダーを用いて，プロのアナウンスを視聴する。

指導上のポイント

①次の順序で活動させる。

1）代表生徒に伝えさせる。
2）ワークシートに書かせる。
3）隣席の者と見比べさせる。
4）図１を示して，隣の者と相互評価をさせる。
5）状況に応じて，２～３回繰り返させる。
6）なぜうまく伝わらなかったのか（伝わったのか）をまとめさせ，ワークシートに記録させる。
7）発表させる。

②次の順序で活動させる。

1）ラジオの中継を聴き，場面を思い描かせる。
2）同じ場面をＶＴＲで見させ，想像と比べさせる。
3）感想を自由に発表させる。
4）効果的な音声伝達の条件をワークシートに記録させる。

学習事項

㈡的確な音声伝達の例を通し音声伝達のよい条件を考える。

評価の観点☆☆☆☆☆

①音声で伝えることの難しさを実感できたか。
②効果的な音声伝達の条件を把握できたか。

指導者の感想＊＊＊＊＊

一部の生徒にとっては，野球などふだん気にも留めていないものの一つであった。「野球なんて知らない」生徒にまずはルールから説明しようとしたが，これが意外にも難行となったのであった。

第二時

学習事項

㈠相手に的確に状況を説明するときの話し方を工夫する。

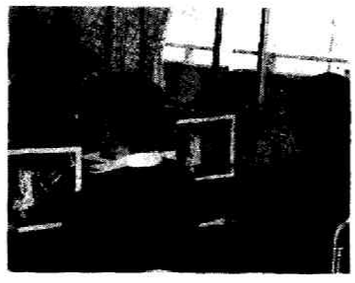
学習事項

㈡相手によって言い方を変える必要のあることを理解する。

学習活動

①写真に写された状況を細かく観察した後，他の生徒に説明する。

②写真に写された状況を細かく観察した後，それを「幼稚園児」に伝えるつもりで他の生徒に説明する。



評価の観点☆☆☆☆☆

①相手に的確に伝えるための工夫ができたか。

②相手によって言い方を変えることの意義が理解できたか。

次時への課題★★★★★

学校の近くや自分の家の近くの街で，商店の人にサインをしてもらう。（3か所）

指導上のポイント

①②次の順序で活動させる。

1）生徒を2～3人のグループに分ける。

A写真を見て他者に説明する生徒

B写真を見ないで説明を受ける生徒

2）各グループに写真集を一冊ずつ貸し出し，演習させる。

3）ワークシートに気づいた点を記入させ，数人を指名して発表させる。

②では、特にどんなことに注意をするのかを考えさせる。

★失礼のないように依頼させる。ただし，どう言うのかは各自で考えさせる。

・無理に頼ませない。

・一つの店に集中させない。

第三時

学習事項

㈠的確な依頼時の話し方を考える。

学習活動

①前時の課題の成果を発表し「人に何かを依頼する場合」の的確な話し方を考える。

いきなり「サインをください」と言われて、不審がるのももっともであるが、芸能人になったつもりでサインをくださった方もいたようである。

指導上のポイント

①次の順序で活動させる。

1）報告書を提出させる。

2）何人かを指名し，失敗した例と成功した例とについて，それぞれの状況と配慮した点について説明させる。

3）生徒の報告から，的確な話し方に関する重要点をまとめさせ，それをワークシートに記入させる。

第三時

学習事項
(二)相手や状況に応じた話し方を工夫する。

②「借金を断る」「プロポーズを断る」という場面設定のロールプレイングにより，相手や状況に応じた話し方を工夫する演習を行う。

②次の順序で活動せさる。
1）相手と状況のパターンを示す。(生徒に意見を出させてもよい。)
2）生徒を2～3人のグループに分け，演習させる。
A借金<プロポーズ>をする生徒。
B借金<プロポーズ>を断る生徒。
C記録する生徒（Aの生徒と兼任してもよい。）
3）ワークシートに相手や状況に応じた話し方の注意点を書かせ，数人を指名して発表させる。他者の発表を聴いて書き加えることがあれば書かせる。

指導者の感想＊＊＊＊＊
女子生徒の中には，「自分はこう言われたい」という願望をもっている者もいたようだ。「君の作った味噌汁が飲みたい」などというような所帯染みたことを言う者がいてもよいのだが。

評価の観点☆☆☆☆☆
①人に何かを頼んだり，断ったりする時の話し方について，関心をもち授業に積極的に参加することができたか。
②人と話をする時に注意する点を把握することができたか。
③相手を思いやって話すということの重要性を理解できたか。

第四時

学習事項
日本語特有の婉曲表現を学ぶ。

学習活動
「婉曲表現」の意味説明を受け，自分の知っている表現例をワークシートに書き出す。

指導上のポイント
①②日ごろ何げなく耳にしているものから，初めて学ぶものまであろうが，いずれにしても，どのような場面で使われるのかを考えさせる。

第四時

①その中から特に「依頼」の婉曲表現を取り上げる。
②次に「断り」の婉曲表現を取り上げる。
③婉曲表現を使わずに言うとどうなるかを考える。

また，なぜ婉曲表現を使うのかも考えさせる。
③婉曲表現を使わずにはっきりと言うと，相手にどのような印象を与えるかを考えさせる。
また，時としてはっきり言う必要があることも学ばせる。（具体例を挙げさせる。）

評価の観点☆☆☆☆☆
①「依頼」「断り」の婉曲表現に関していかに使うのかを理解できたか。
②婉曲表現を使わずに言うと相手にどのような印象を与えるのかを理解できたか。

第五・六時

学習事項
(一)話し言葉による表現の学習から考えたことをまとめる。

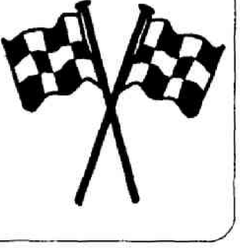
学習事項
(二)話し言葉による表現についての自己の考えを他者に伝える。

学習活動
①前時までのワークシートを参考にして，話し言葉による表現について総まとめを行う。さらに，今後の生活にどう生かしていくのかを書く。
②これまでの学習を通して学んだこと・考えたことを各自1～2分程度で発表する。

指導上のポイント
①今後の生活の中のどのような場面において，話し言葉が重要になるのかを考えさせ，200～400字程度で書かせる。
②発表をＶＴＲに録画し，評価の資料とする。（口頭試問としてもよい。）
また，実践の場として位置付け，これまで学んできたことを生かした話し方の工夫を促す。

評価の観点☆☆☆☆☆
①話し言葉による表現について関心をもち，今後の生活に生かしていこうとする一つのきっかけとすることができたか。
②話し言葉による表現について学習してきたことを振り返り，考えをまとめられたか。

生徒の感想＊＊＊＊＊
∽自分の言葉遣いを見つめ直すいい機会だった。
∽日本語の難しさ・奥深さを再認識させられた。
∽ふだん何気なく婉曲表現を使っていることに気づいた。
∽言葉遣いはＴＰＯに応じて変えるものだと理解した。
∽『百聞は一見に如かず』の意味がよくわかった。



6．評価の観点（事後評価）

①話し言葉による表現の重要性に気づき，自らの生活を見つめ直すことができたか。
②自分の立場や目的，場に応じた適切な話し方をしようとする態度を，身に付けたか。
③様々な目的や場に応じて話すために気を付ける点を，具体的にとらえることができたか。
④日本語における話し言葉の特質を，知ることができたか。
⑤授業に意欲をもって臨み，演習に積極的に参加しながら，自主的に課題を見つけられたか。

＜評価の資料＞
- 各時間の活動状況
- 各時間のワークシート
- 第6時のビデオテープ

これらにより，総合的に評価する。

7．考　　察

話し言葉に関する単純で容易な演習に次々に取り組むことで，生活実感をもった高校生として自己の確立につながる発見が生まれるのではないか。今回の研究では，以上のような仮説のもとに指導案を組み立ててきた。実際の授業では，同じ演習においても個々の生徒によって得るものが様々であった。また，他の生徒との意見交換の中で，なぜ感想が違ってくるのかということから，日常の自分達の姿を客観的に眺め，自分らしさを大切にして生きていくために，まず自分をよく知り，自分なりの話し方を身に付けようということに発展することができた。

生徒自身の口と耳と目を十分に働かせる授業を試みてきたが，ほとんどの生徒は大変熱心に取り組み，最後のビデオ撮影まで積極的に参加していた。当初おとなしい生徒の参加意欲が懸念されたが，グループ演習が主であったためか，全く参加できないという様子は見られなかった。第1時の演習の評判が良く，生徒たち自身も授業に期待を抱いているようであった。それに応えるべく，指導者の準備にも熱が入ったが，この授業では，図や写真，テープレコーダーやビデオカメラなど，用意をするものが多様で，授業の流れをこわさぬよう，それらの使用方法やタイミングに腐心することとなった。また，学校により視聴覚機器の設置状況等が異なっているため，工夫が必要であった。

生徒には，少し言い方を変えただけで伝わり方が大きく変わる，と言う者が多かった。言葉の力やそれを操る人間の責任を感じ取れたのではないかと思う。また，気づかぬうちに婉曲表現というものを使っていた，と言う者も多かった。婉曲表現に関しては，他者を相手にした演習の後だったからか，ひとつの文化として肯定的に受け止める者が多かった。なお，帰国子女等のいるクラスでは他の言語との比較に話が及ぶこととなった。

この授業全体を通して生徒が獲得できたことは，高校生ともなればふだんから意識せずとも分かっていたことであろう。しかし，それらを演習を通して自らの意識下から掘り起こし，自分の言葉で表現することで，あらためて言葉とともに生きていく自分を確認できたのではないだろうか。全体の授業を通しての感想の中には，「もっと言葉を知りたい，もっと良い話し方を学びたい。」というものが思いのほか多く，具体的な語彙や話し方のテクニックの学習への発展の可能性が感じられた。一方で，彼ら自身が日常の生活の中で決して自分の話し方に自信をもっているわけではなく，自分の発する言葉の影響に過敏になったり，対人関係に気を配りながら言葉を模索しているという姿が見えてきた。これらの不安を乗り越えさせ，自信をもって生き抜いていけるような力を育てるよう，これからも研鑽を重ねていきたい。

2　言葉がもつ「力」に注目し，言語文化への関心を深め，自己を確立する態度を育てる古典指導の工夫

1．単　　元　「情報」を題材にした古典作品に親しみながら，言葉のもつ力を認識する。

2．教　　材　「応長の頃」(『徒然草』第五十段)
「呂布と貂蝉」(『三国志演義』より)

3．単元の目標

① 古典の魅力を発見し，古典に親しみながら生涯を通して学んでゆく態度を培う。
② 現代に通じる古典世界の人間のありようを学び，古典の普遍性に思いをいたす。
③ 古文と漢文を併せて学びながら，基本的な言語事項について理解する。
④ 言葉がもつ「力」について考え，情報化時代の生き方を考えるきっかけとする。

4．単元設定の理由

情報化・国際化の進展が話題になって久しいが，世界を網の目のように結ぶネットワーク＝インターネットの登場により，それらの語の意味するところも大きく変わりつつある。自分がいる「今，ここ」から，世界へとアクセスが可能な状況になりつつある現在，英語が国際語としての地位を確立しつつある一方で，自国の文化は自国の言語で発信するのがよりよいという認識もある。このような状況を国語教育という視点からとらえ直す時，日本語を用いた思考力・自己表現力を高めることと，日本語を通して自国の文化を深く理解することが要請されているといえよう。また，社会情勢を顧みる時，情報の不足が様々な混乱を生み出すのと同様に，情報過多で何が本当なのか判断のつかない状況が生まれつつある。様々な情報を取捨選択して生きてゆかなければならない現在，良識にもとづく正しい判断を下す力を与えることも，国語科の指導の中で目指すべき課題となりつつある。

古典は，何も本の中に閉じられた世界ではない。そこには，現実を生きる力が内包されているはずである。その力を教室の場に解放する授業を，「古典講読」の一単元として設定した。ともすると「古い」ものとして敬遠されがちな古典の中に，現代と変わらない人間の生のありようを見つけさせるとともに，情報を判断し，発信する者としての知識・表現力を高める授業を目指したい。

この単元では「言葉の力＝生きものとしての言葉」をテーマとして設定した。氾濫する情報を取捨選択して生きていく上で，「言葉の力」を認識させることが大切であると考えたからである。同時に，何気なく使っている言葉が，使い方一つで大きな作用をもたらすことを生徒たちに認識させ，自らの言葉の使い方に責任をもつようになってほしいと考えたからである。

教材としては，古文では「応長の頃」(『徒然草』第五十段)，漢文では「呂布(りょふ)と貂蝉(ちょうせん)」(『三国志演義』)を用いる。「応長の頃」は，兼好が体験した流言飛語事件を具体的に述べたもので，当時の社会状況をも生き生きと伝える章段である。流言飛語に対応した兼好の姿が浮かび上がるとともに，具体的な描写の分析を通して，流言飛語の構造といった抽象レベルにまで考察を広げることが可能であり，生きものとしての言葉の実態を理解させるのにふさわしい教材である。また，現在時制と存続の助動詞を多用した臨場感あふれる描写は，表現・語彙を指導する上でも，豊かな教材性をもっているといえる。「呂布と貂蝉」は，董卓(とうたく)と呂布という二人の英雄を，巧みな情勢分析と話の誘導によって仲違いさせる話で，「三国志」の中では唯一女性が活躍する部分でもある。「三国志」はコミックやテレビゲームなどを通じて生徒たちになじみ深い作品でありながら，そのもとになった『三国志演義』が元末・明初期の作品であるため，

使用される語彙が古代のものとは異なっていることなどから，教材化されることが少なかった。今回，ストーリー展開の面白さを伝えることを考慮して，現代語訳（立間祥介訳，徳間文庫）を中心に置いた教材化を試み，印象・理解を深めるために適宜原文を配置しながら言語事項の指導にも配慮した。「応長の頃」の学習を受けて，情報操作の様子を具体的にたどらせながら，生きものとしての言葉が躍動する姿をとらえさせたい。なお，この授業を通して，「三国志」全体に対する興味・関心を高め，古典の世界に積極的に親しむ姿勢も養いたい。

授業の形態としては，導入時にプリント学習を組織して教材の内容を十分に把握させる。その際，通釈にのみ時間を充てるのではなく，作品世界に触れさせることに重点を置く。その上で，現代との接点を意識させた表現活動との有機的な関連を図る。「応長の頃」のまとめにあたる「平成の頃」の短文作成では，流言飛語を追体験させることで，それを相対化する視点を獲得させられると考える。「呂布と貂蝉」における巧みな言葉の用い方を分析する指導では，自分の日常生活での言葉の用い方と関連させることによって，「言葉の力」を実感させることになるだろう。まとめの作文は，古典に描かれた世界を生徒たちの身近な問題としてとらえさせ，「言葉の力」をしっかりと認識させるものとしたい。

これらの授業を通して，普遍的価値をもつ古典に深い関心をもち，生涯を通じて古典に親しむ態度が身に付けばよい。また，情報とそれを支える「言葉」の重要性に気づいた生徒は，自らの言語使用を省みるとともに，情報化された現代における言語使用の状況に思いをいたし，自らの生き方を積極的に考え判断していくようになる。そして，自己の状況を把握し，見つめ直すなかから，社会の変化に主体的に対応する力＝生きる力も身に付くと考える。

5．指導計画（第２・３学年対象　配当時間９時間）

学　習　活　動・・・・・・・・・・・・・・・・　　留　意　点・・・・・・・・・・・・・・・・

＜第１時＞

【導入】

学校の怪談にどんなものがあるか？
最近の噂・デマで知っているものがあるか？

↓

作品への導入

噂話・デマの例を古典の中でみていこう

【展開１】本文プリント使用

学習事項：「応長の頃」の内容を理解する

読　解　1　正しく音読する
　　2　語句の意味を理解する
　　3　主語を確認し，内容を読みとる

↓

＜学習活動＞

★プリントの空欄（重要語・主語）を埋める
★あらすじをつかむ

◎毎時間プリントを回収・点検・評価する。

- 適当な例が出ないときはこちらから示す。
- 人権に配慮する。
- 噂の広まるポイントについて考えるように促す。

- 本文プリント（原文と現代語訳）を使用する

- 範読の後，斉読する。
- 地名など特殊な読みに注意させる。

【評価の観点】

① 地名等，特殊な読みに注意し正しく音読できたか。
② 主語を確認し，内容がつかめたか。

＜第２時＞

【展開２】第一段落プリント使用

学習事項：噂の広まるポイントを理解する

読　解　1　指名により音読する
　　2　時間・場所を表す語句を見つける
　　3　噂の広がり方を読みとる

＜学習活動＞

★プリントの設問に答える
・第一段落のあらすじをつかむ
・噂の広まるポイントを考える

＜復習＞
全体のあらすじを確認する。

・現代の噂を例にあげ，共通点を示すのもよい。
・時間や場所が具体的　　・責任のなさ
・いかにもありそうな話題
・不安感をあおり，かつ適度な安心感を与える
・遠く（疎）から近く（親）へ　　など

◆語彙指導：助動詞「たり」（存続の用法）

【評価の観点】
①第一段落の内容が確認できたか。
②身近な問題として設問を考えることができたか。
③噂の広まるポイントが理解できたか。

＜第３時＞

【展開３】第二，三段落プリント使用

学習事項：作者の噂に対する態度を考える

読　解　1　指名により音読させる
　　2　主語を確認する
　　3　一般の人々と作者の違いを読みとる

＜学習活動＞

★プリントの設問に答える
・人々と作者の行動，態度の違いをつかむ
・作者の行動について，意見をまとめる

＜復習＞
どんな噂に真実味があるか，確認する。

◆語彙指導：助動詞「き」と「けり」
（自分が体験した過去，体験していない過去）

・作者について、時代・身分・立場等を簡単に説明し，本文の理解を促す。

【評価の観点】
①作者と人々の，行動・態度の違いを正しくとらえることができたか。
②作者の行動・態度を理解し，批評できたか。

＜第４時＞

【まとめ】短文作成プリント使用・グループ作業

学習事項：群集を動かす言葉の力について考える

確　認　ポイントを押さえた言葉の使い方により，多くの人に共通のイメージを想起させられることを確認する

＜学習活動＞

★「応長の頃」の形式を使って「平成の頃」をグループで創作する
★できた作品を発表し，評価しあう

○次回は，同じ言葉の力でも情報操作という面について，漢文で学ぶことを伝える。

・創作にあたって，
　・噂の広まるポイントを押さえさせる。
　・自分たちの取る態度を明らかにさせる。
　・人権に配慮するよう伝える。

・学習したことが生かされているかという点に気をつけながら，発表を聞かせる。

【評価の観点】
①グループ作業に全員が参加しているか。
②噂の広まるポイントなど，今までの学習が生かされているか。
③グループの創意工夫があるか。

生徒の作品例

「平成の頃、
事件（関東地方に巨大な断層が発見された）ということありて、その頃、
日数（二週間）
ばかり、日ごとに、
場所（関東地方）
の人、
行動（食料と防災用品を買いに）
とて出て惑ふ。
「昨日は（北海道や神戸で地震が起こった）。」
「今日は（国会で会議が行われた）。」
「ただ今は（あらゆる店から食品と防災用品が売れている）。」
などと言ひ合へり。まさしく見たりと言ふ人もなく、そらごとと言ふ人もなし。上下、ただ事件（断層から引き起こされる地震のこと）のみ言ひやまず。

生徒の感想例（兼好に対して）

○兼好は、他の人よりはずいぶん冷静だと思った。
○初め、半信半疑の時に、人を使って調べるのは頭がいいと思った。
○人々の様子に影響されて、一度は信じたっていう気持ちはけっこう分かる。
○誰も鬼に会った人がいないからといってウソだと決めつけてしまう作者は、つまらない人だと思った。人ごとのように見てないで、自分も探す方についたらもっと楽しいのに。

第5時

【導入】

「三国志」を知っているか？
「呂布（りょふ）と貂蟬（ちょうせん）」の話を知っているか？

↓

「三国志」の概略とこの話までの経緯を説明する

↓

作品への導入

「呂布と貂蟬」は、権力者を引きずり降ろすため情報操作が行われた話である。ここでは操作の時の言葉の使い方に注意しながら読んでいこう

【展開1】プリント①－1　　王允（おういん）による操作

学習事項：「連環の計」とはどんな計略か

読　解　1「連環の計」の箇所を漢文で読む
　　2 董卓（とうたく）と呂布の性格表現を見つける
　　3「連環の計」について読みとる

↓

＜学習活動＞

★登場人物の人物関係図を書く
★誰を倒すのか？
★董卓の強みは何か？
★呂布と董卓の性格は？

- 知っている人物やストーリーをあげさせるなどして，概略説明に入りやすくする。ただし，深入りはしない。
- プリントで，これまでの話を説明し、「三国志」のどのあたりの話なのかを説明する。
- 登場人物の呼び名について確認する。

横山光輝「三国志」より

◆句法指導：「令」　（使役形）
　　「若何」（疑問形）

【評価の観点】
①歴史的背景を理解できたか。
②人物の関係を理解できたか。

第6時

【展開2】プリント①－2～4　王允による操作

学習事項：呂布の追求を王允はどうかわしたか

読　解　1　「連環の計」が実行される過程を追う
　　2　王允の言いわけを読みとる

↓

＜学習活動＞

★貂蝉が董卓の所に行ったことを，初め呂布はどうとらえたか？
★王允の説明を，呂布はどうとらえたか？

【展開3】プリント②～④　貂蝉による操作

学習事項：董卓のもとに送られた貂蝉は，呂布の気持ちをどう引いていったか

読　解　1　貂蝉のしぐさが表れている所を見つける

↓

＜学習活動＞

★貂蝉の「泣くふり」「媚を送る」「涙」は，それぞれ何を意図した動作か？

＜復習＞
人物関係図を黒板に書き，「連環の計」を確認する。

- 董卓は悪者，自分は弱い者というイメージを相手に植え付けているところに注意させる。
- 王允の「董卓は，呂布に貂蝉をやると言って連れて帰ったのだ。」という言葉の効果に注意させる。

- しぐさが中心の場面であることに注意させる。
- しぐさによって後の言葉が生きてくることに注意させる。

【評価の観点】
①連環の計が実行される過程が理解できたか。
②王允のうその効果が理解できたか。
③貂蝉のしぐさに込められた意図を理解できたか。

第7時

【展開4】プリント⑤　貂蝉による操作

学習事項：呂布の気をどう引き，たきつけたか

読　解　1　呂布、董卓の呼び方を確認する
　　2　貂蝉の行動を読みとる

↓

＜学習活動＞

★貂蝉の行動を順を追って抜き出してみよう
★貂蝉のそれぞれの行動のねらいは何か？

【展開5】プリント⑥－1～3　貂蝉による操作

学習事項：董卓の追求をどうかわしたか

読　解　1　呂布，董卓の呼び方を確認する
　　2　貂蝉の言いわけを読みとる

↓

＜学習活動＞

★鳳儀亭で呂布と貂蝉とが抱き合っていたことについて，初め董卓はどう思ったか？
★それについて，貂蝉はどう説明したか？

＜復習＞
董卓のもとに送り込まれた貂蝉の行動を確認する。

＜板書例＞

呼び方の工夫
①呂布との会話
董卓―「おいぼれ」
呂布―「英雄」
②董卓との会話
董卓―「貴人」
呂布―「家奴」
（「下郎」）

- 王允の言い訳との対応に注意させる。
- 漢文がどのように現代語訳されているか，注意させる。

◆句法指導：「寧」（選択形）

【評価の観点】
①人物の呼び方と，その効果が理解できたか。
②貂蝉の策略が読みとれたか。

第8時

【展開6】プリント⑦　　王允による操作

学習事項：王允が呂布に董卓を殺すことを決心させた決め手は何だったか

読　解　1　王允が呂布を操作する箇所を漢文で読む
　　2　呂布の怒りを董卓に向ける過程を読みとる
　　3　実行に踏み切らせるための言葉を確認する

＜学習活動＞

★王允は董卓のどういう行動を非難し，呂布をたきつけているか？
★王允は父子の間柄を気にする呂布をどう説得したか？
★呂布に決意させた王允の言葉は何か？

＜復習＞
前回までで，呂布の董卓に対する気持ちがどうなったかを確認する。

◆句法指導：「非」「与」「耳」の用法

・呂布の自尊心をくすぐり，たきつけてゆき，しまいには，大義を与えて董卓殺害の実行に踏み出させる過程を追う。

【評価の観点】
①全体の流れを理解できたか。
②呂布の気持ちを動かす言葉の力を実感できたか。

第9時

【まとめ】

学習事項：言葉のもつ力について考える

＜学習活動＞

1：全体でのまとめ
★王允と貂蝉による操作を振り返ってみよう
・情報操作のポイントは何か？
2：個人でのまとめ
★感想を書いてみよう
・印象に残った人物を挙げて書こう
・各場面の中で言葉の力が生かされていると思う場面を一つあげ，授業をふまえて感想を書こう

○単元全体の感想をまとめる。

＜復習＞
全体の話の流れを確認する。

・生徒の発言を中心にまとめていく。

＜板書例＞

王允
・相手の性格を正しく分析する。
・立場・権力関係を利用する。
・アライドをくすぐる。
・大義名分を与える。

貂蝉
・しぐさによって，(涙)
・相手の呼び方。

・余裕があれば李儒（りじゅ）についても注意を促す。

【評価の観点】
①全体を振り返ることができたか。
②「言葉の力」に気づいたか。
③「三国志」に対する関心を深められたか。

生徒の感想例（抜粋）

○王允について
・昔は国のためにここまでしたのだと思うと怖い。
・自分が娘のように育てた子を董卓にやってまで、董卓をつぶす必要があったのだろうか。
○貂蝉について
・最後に呂布に董卓を殺させる演技がすごい。
・性格が悪い。呂布と董卓がかわいそう。
・一つの計に使われて死んでいく姿は、女性として悲しいと思う。
○呂布について
・董卓に息子として引き取ってもらう時点で最初の義父を裏切っているのに、また女一人のために董卓を裏切ることになる。その姿に、せっかくの力を忠誠心がないために生かせないつらさを感じる。
○「言葉の使い方」について
・呂布に完璧に董卓を悪人と思いこませている王允の話術はすごい。
・命をかけてウソをつくなんて、人間は恐ろしいことができると思った。言葉と、それを信じることは恐ろしいことなのかもしれないと思った。
・鳳儀亭での言い逃れがうまい。男が守ってやりたくなるようなセリフを使っている。
・おだてたり、けなしたり、泣くふりをしたり、その言葉の選び方や使い方が上手だと思う。

6．評価の観点（事後評価）

①古典作品を身近なテーマで読むことにより，親しむことができたか。

②古文と漢文を統一テーマで連続して学習することで，日本と中国の文学における人間像の普遍性について考察できたか。

③プリント学習やグループでの短文作成・まとめの感想文作成に積極的に参加し，自分の考えを主体的に深めることができたか。

④次のような言葉のもつ「力」について再認識し，「言葉を使っていかに生きるか」ということを考える契機とすることができたか。

- 言葉によって個人の心を動かし，行動させることができる。
- 言葉によって多くの人々に共通イメージを与え，群集を動かすことができる。
- 状況・立場・相手の性格による使い分けなど，巧みな使い方により，言葉が生きたものになる。

7．考　　察

古典の授業というと，どうしても本の中だけに閉じられた世界を扱うことになりがちである。しかし，「今」に通じるものがあるからこそ，古典は読み継がれてきたのである。生徒たちが古典の世界に親しみ，それを自分の問題としてとらえるためには，「今」に通じる魅力あるテーマが必要であろう。今回は「情報」というテーマを設定し，教材を選択した。

古文教材「応長の頃」では，作者の態度についてさまざまな意見が出た。例えば「冷静な判断力がある」「なぜ自分自身で行かないのか」などである。おもしろかったのは「疑っていても，みんなと一緒に走った方が楽しいのに」というもので，これらの意見をもとに，自分たちの噂に対するさまざまな態度，例えば，直接関係がないことに対しては，安易に噂を再生産しがちであること，などに気づかせることができた。「平成の頃」という短文作成は，グループで相談しながら行わせたが，真実味をいかに出すか，細かいアドバイスをする必要があった。また，時間的制約もあり，とびぬけてユニークな発想はなかなか出てこなかった。前もって新聞・ニュースなどに注目させて準備をさせるなど，きめの細かい事前指導が必要であった。

漢文教材『三国志演義』は，まとまった量を読ませるため，主要部分以外は現代語訳で行った。「三国志」は，コミックやゲームソフトで知っている者も多く，ふだん古典に消極的な男子生徒も熱心に取り組んだ。登場人物に感情移入することで，作品に親しむことができたようである。授業は，内容理解と同時に，状況に応じて次々と繰り出される巧みな言葉を指摘させることで進めた。同じような身近な例を紹介すると認識も深まり，作品内の言葉を「自分の使う言葉」としてとらえられたようである。なお，現代文教材としても中国翻訳文学はあまり採られておらず，ビデオ教材の活用，「三国志」を題材とした小説の紹介などを通して，さらに発展させることが可能な教材だと思われる。

今回の授業では，言葉を使うこと（発すること・受け取ること）の背景には，的確な情報・状況分析が必要であることをも理解させたかったが，理屈としては分かっても，これから多くの作品の中でそれを体験する段階を経なければ，真の理解とはならないだろう。一層の授業工夫の必要性を痛感している。

3　現代小説を読み，自己を確立する態度を育てる現代文指導の工夫

1．単　　元　現代小説を読み，人生の転機について考える。

2．教　　材　山田詠美　『晩年の子供』

3．単元の目標

①様々な意見と向き合うことにより，自己を見つめ直す。

②主人公が死を意識することを契機として，成長していく過程をたどり，自己の人生への認識を深める。

4．単元設定の理由

高度化する情報化社会や急速に進展する国際化社会の中で，的確に情報を収集し，正確に判断・処理したうえで，自己の考えや立場を明確にし，他者との相互理解を深めていくことが，現代における課題の一つであると考えられる。このような状況に対応するために論理的な思考力や創造力などの育成を通じて，主体的に判断し行動できる力を培うことが要求されている。そのためには，まず，自分自身を見つめ直し，より深く認識することが必要になる。

現在の高校生を見ると，友達同士の会話の活発さなどにおいて，表面的には社交的，また積極的である。しかし，自らの意見を述べ，相手の意見を聞くような状況では，感覚的な傾向が強く，文章に表現する場合や他者との討論となる場合においては，それ自体への積極性の乏しさもさることながら，筋道を立てて思考し，明確かつ簡潔に表現しようとする意識が希薄であることが多い。それは，自分の考えが他者にどのように認識されるかということに対する意識の乏しさと，自分の考えが他者にとって十分理解できるような内容であるのかという問い掛けの欠如が要因になっていると考えられる。そしてそれは，自分自身を相対化して客観的にとらえる視点の欠如であると言えよう。

このような現状をふまえ，教材を選定するに当たっては，まず生徒が興味をもって取り組めることを考慮し，生徒が共感しやすい現代を舞台とする作品を候補とした。また，様々な興味・関心を引き出し，それに応じた論理展開を行うためには，読者による様々な読解の可能性をもった，多様な意味作用を生成する言語による小説材料が適当であると考えた。さらにその中で，ある程度人物像がしっかりとしていて，思考と行動の関係性をつかみやすいことを考慮し，いくつかの候補の中で，山田詠美の『晩年の子供』を選択した。この小説を選んだのは，十歳の少女がありふれた日常生活の中で，ふとした事件によって自らの死を確信し，それを見つめるという体験を通じて自己にまなざしを向け，自分のものの見方やとらえ方をより深いものへと変えていくという内容，及び作者である山田詠美が比較的若い世代の作家であり，生徒の年齢にも近いこと，その著作も身近な日常生活にふれるものが多いことなどを考慮したものである。一人の少女が自己を見つめて意識を深めていく構造を論理的な思考で分析していくことで，小説に描かれた人生を深く理解し，生徒自身が自らを見つめ直すことが可能になると考える。

以上のような認識と教材により，「現代小説を読み，自己を確立する態度を育てる現代文指導」の試みとして，ここでは「現代小説を読み，人生の転機について考える」という単元の中で，上記の目標を設定した。小説に描かれた人生に喚起される興味・関心が自分自身のものの見方や考え方の基盤の一つであることに気づかせ，他の生徒の言葉と出会い，それと向き合うことで，物事を筋道たてて考えて表現する能力が養われると考えたからである。

そのため，一斉授業や班別による授業形態ではなく，小グループへの指導を軸とする授業計画を立案した。具体的には，その時点において共通する課題をもつ小グループに対して，指導者が生徒の感想に基づいた，そしてより深い読解につながるような課題を次々に与え，生徒がそれに答えるなかで自分の思考を論理的なものとしていくという形態になる。しかし，この場合，生徒がある程度主体的に教材に取り組む姿勢と，小説を読解する基礎能力が必要となるため，現状を考慮して基礎・応用の二形態を設定して授業を試みた。

＜基礎編＞

生徒に主体的に小説のあらすじや心理描写などを読みとっていく姿勢が確立されておらず，また，あらすじや登場人物の関係・心理などの読解することに生徒が不得手な場合を想定する。指導者があらかじめプリントによって提示した課題の中から，自らの興味・関心に応じて自分の志向する課題を選択し，それを解決する中で，他の生徒や指導者と対話しながら思考を深めていく形態とした。

＜応用編＞

生徒が主体的に小説の読解を行う姿勢をもち，基礎的な読解能力がある場合を想定する。各自の興味・関心に応じて個別に与えられた課題を，他の生徒と意見を交換しながら解決し，また，新たな課題を見つけ，さらにそれを解決していくことで，自らの論理的な思考を深めていく形態とした。

このような二形態としたのは，生徒の授業の主体的参加と集中度・読解能力が低い場合，指導者が，どのような方法を考えればよいかということを明確にした上で，一つずつ到達した目標を確認して授業を進めていく形態がふさわしいと考えたからである。

国語の授業の形式は内容の差こそあれ，従来，小・中・高と，基本的な学習の形態が固定化されているのではないだろうか。あらすじに沿って心理描写・情景描写を理解していく授業，それはもちろん大切な学習方法だと言える。しかし，今回はあらすじに沿って読解するのではなく，問題点を提起し，それを解決する方法を中心とし，その過程で他者の様々な意見（主人公の考えも含む）と向き合わせることにより，自己を見つめ直させ，そこから自己確立の態度（生きる力）を育てる授業実践を計画した。それは，一人一人が主体的に課題に向き合う姿勢を育むものであり，また，自分自身で他の生徒の意見を聞き，論理的に思考し，表現する力の育成へとつながっていくものでもある。このことを通じて，自ら問題を見つけ，解決していくことが，生徒一人一人の＜自己＞を確かなものにすると考えている。

5．指導計画（第１，２学年対象　配当時間９時間）

基礎編

【第１次　導入】（１・２・３時）

凡　例
- 学習事項
- 学習活動
- 教材・方法
- ○留意点
- 評価の観点

１教材に対する興味・関心を導き出す。

- ①教材全文を通読する。→作者を紹介し，プリントを使用する。
- ②初読の感想をまとめる。→20分，400字詰め原稿用紙１枚程度。
  - ③自分が興味を持った箇所を発表する。
    - →数人を指名する。　○発表者以外の生徒には，自分のものとの共通点，相違点を考えさせる。
    - ○授業終了後に，生徒が多く興味をもった部分を整理する。

感想をもとにして，自分の興味・関心をとらえることができたか。

２教材のあらすじと内容を理解する。

- ①死を確信した主人公の心理を理解する。→プリント①を使用する。
- ②「今まで見えなかったものが見えるようになった」体験についてまとめる。
  - ○日常的な例をあげ，自分自身にもあるか，考えさせる。
  - ○どのような状況で「見える」ようになるか，考えさせる。
- ③まとめたことを発表する。→数人を指名する。
- ④発問「自分だったらどうするか。」　○主人公と同じか，異なるか，立場を決めてまとめさせる。

死を意識してからの主人公の心理やものの見方の変化について理解できたか。
主人公と自分を比較して考えることができたか。

【第２次　展開】（４・５・６時）

１教材についての理解を深める。

- ①主人公の考えに対して，自分はどう考えるか、発表する。→前時にまとめたものを発表させる。
  - ○自分のものとの共通点・相違点を確認させる。
- ②　プリント②（思いこみによる勘違いについて）
  　プリント③（主人公が一人で悩んでしまうことの不思議）
  のうち，興味をもつものを選択する。
- ③プリントの設問について，共通する意見を持つ生徒同士で小グループを作る。
- ④それぞれの課題について，グループ内で話し合い，検討して個々でまとめる。

プリント②について
ア．似た体験（情報を鵜呑みにする）はないか。
イ．なぜ主人公はこのような勘違いをしたのか。
ウ．間違った情報が原因の事件を調べる。

プリント③について
ア．似た体験（家族に悩みを話したが，あまり熱心に聞いてくれなかった）はないか。
イ．この作品の「いじめ」についての意見。

- ⑤自分の考えの欠点や問題点を認識して，論理的なものとする。→他の生徒と意見を交換し，話し合う。

教室内を自由に移動させ，グループで作業する。
その時点での課題を同じくする者同士の小グループを作る。
発問や指示は，教室を巡視しながらグループや個別の生徒に対して行う。

○巡視しながら生徒の論理の問題点や欠点を指摘し，それらを解決するには何を考えればよいか，助言する。

他の生徒と話し合うことができたか。
- 相手の意見を整理して分析できたか。
- 自分の意見を整理して説明することができたか。
- それによって自分の考えを深めることができたか。

2　プリント②と③の課題について，理解を深める。

①それぞれの課題について，どのように考えたか、発表する。　○数人に発表させ，生徒に自分の考えとの共通点，相違点を考えさせる。

②　プリント②と③の課題について，まとめる。

→プリント②について
ア．「私が死んだらどうする」という問いに対する家族の反応についてまとめる。
イ．主人公が誰にも相談せず，一人で悩んでしまった原因について，自分の考えをまとめる。

→プリント③について
ア．主人公のどのような点が普通の子供と違っているか、考える。
イ．主人公が鵜呑みにした情報源の特性を認識する。

○主人公の心理の推移について理解させる。

周囲の人々と私の関係が理解できたか。
主人公の質問に対する家族の反応が理解できたか。
病気に対しての主人公の心理の変化が理解できたか。

③主人公が教室の中でどのような存在であったかをまとめる。→主人公がどのような形でいじめをおこなっていたか。

④ 死を意識してからの主人公の心理の推移をまとめる。

○主人公の心理や物の見方が大きく変わっていったことについて，その契機と変化の内容，理由について，自分の考えをまとめさせる。

死を意識してからの主人公の心理やものの見方の変化について理解できたか。

3 死を静かに受け入れる悟りの過程を考える。

1 プリント④の課題をまとめる。

ア．似た体験（石のような物に愛着を感じる）についてまとめる。
イ．主人公が石に愛着を感じたのはなぜか。自分の考えをまとめる。
ウ．死に対する主人公の考え方がどのように変化していったかまとめる。
エ．主人公が初めてチロに噛まれたことを家族（母親）に告白する気になった心境の変化について考えをまとめる。

○これまでと現在とでどのように変わったか。また，契機となったものは何かに注意させる。

死に対する主人公の気持ちの変化がきちんと理解できたか。

【第3次　まとめ】（7・8時）

1 自分の論とその過程について，自己評価する。

①　プリント①～④を見ながら，自己評価表に記入する。

自分の学習課程とその結果について，正しく理解できたか。

2 教材とのかかわりの中から，現在の自分のあり方について考え，感想をまとめる。

①感想文にまとめる。　○自分自身にも，今までと違う視点でものを見ることができるようになったことがないか，考えさせる。

→B5レポート用紙1枚程度にまとめる。

自分自身を論理的に考えることができたか。

応用編

【第一次　導入】（1時）

教材に対する興味・関心を導き出す。

①教材全文を通読する。→作者を紹介し，プリントを使用する。

②初読の感想をまとめる→20分，400字詰め原稿用紙1枚程度

③自分が興味を持った箇所を発表する。

→数人を指名する。　○発表者以外の生徒には，自分のものとの共通点，相違点を考えさせる。

○授業終了後に，生徒が多く興味を持った部分を整理する。

感想をもとにして，自分の興味・関心をとらえることができたか。

凡　例
学習事項
学習活動
→教材・方法
○留意点
評価の観点

【第2次　発展】（2・3・4時）

1 学習の目標・展開を理解させる。

①筋道を立てて考えたり，表現することの意義を理解する。　○他者に自分の意見を伝える状況などを想像させる。

②学習の形態について説明する。

→個人の感想に対して、授業者が課題を提示し、他の生徒と意見を交換しながら、一人ひとりが課題を解決していくという形態。

○ <感想に対しての課題→解答→それについての新たな課題→解答>という流れを理解させる。

2 教材の概要を把握し，読解を深める。

①興味を持った部分に対して与えられる質問について考え，解答をワークシートに記入する。

→発問例・なぜ，自分の死を確信したのか。
・なぜ，本当に死ぬかどうか，家族に聞かなかったのか。
・主人公は自分の周囲の人とどのように接しているか。

○ ワークシートはＢ４の白紙で，これから与えられる質問，それに対する解答など，自分が考えたことを記入する。また，氏名等を記入する以外は書式は自由。

②個別に他の生徒と意見を交換して，自分と共通する解答を考えた者を見つけ，小グループを作る。

→③その解答の根拠を文章から読み取り，グループ内で話し合い，検討して個々でまとめ，ワークシートに記入する。

→④最初に与えられた質問に対する解答とその根拠から発展する，新たな質問について考える。

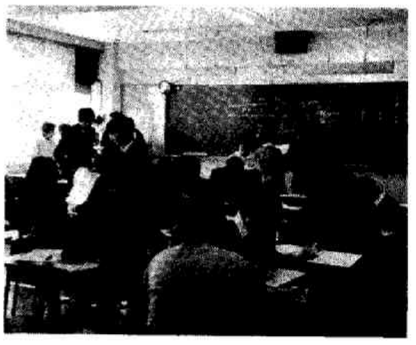
→⑤今までの自分の考えをもとに，主人公の思考の変化とその理由について，ワークシートにまとめる。

→⑥他の生徒と意見を交換し，自分の考えの欠点や問題点を認識して，論理的なものとする。

↓

教室内を自由に移動させ，グループで作業する。
その時点での課題を同じくする者同士の小グループを作る。
発問や指示は，教室を巡視しながらグループや個別の生徒に対して行う。

○巡視しながら生徒の論理の問題点や欠点を指摘し，それらを解決するためには何を考えればよいか，助言する。



他の生徒と話し合うことができたか。
・相手の意見を整理して分析できたか。
・自分の意見を整理して説明することができたか。
また，それによって自分の考えを深めることができたか。

【第3次　まとめ】（5・6・7時）

1 自分の論とその過程について，自己評価する。

①自分がどのようなことを考えたか発表する。→数人を指名して，発表させる。

②自分のワークシートを見ながら，自己評価表に記入する。→発表した生徒のものと比較しながら記入する。

自分の学習過程とその結果について，正しく分析できたか。

2 教材のかかわりの中から現在の自分のあり方について考える。

①感想をまとめる。

→死を意識することによって，自己を見つめて変化していった主人公の思考や心理について，今の自分はどのように考えるか。

②自分の今までのあり方を振り返って自分の人物論を，原稿用紙にまとめる。

→400字詰め原稿用紙２枚程度

○自分を客観的に見た場合，どのような人物といえるかを中心にさせる。

自分自身を論理的に考えることができたか。

◎興味・関心をもとにした対話の例

例	指導者と生徒の対話の流れ　凡例：生徒の意見 ← 指導者の課題・指示	課題と指示の内容
A	思いこみと勘違いに興味を持った。 ← なぜ，自分が病気で死ぬと確信してしまったのか？	生徒の興味・関心に対しての最初の課題。
	まだ十歳の子供だったから。 ← 子供だとなぜ確信するのか？	解答に対しての問題点の指摘。
	テレビの情報を鵜呑みにしてしまったから。 ← 子供だとなぜ，情報を鵜呑みにするのか？	同上。
	そういう性格だから。 ← 主人公はどのような性格か？	主人公の人物像の読みとりの指示。
	「自意識が強い」とか大人びた考え方など。 ← その性格と勘違いしたことにはどのような関係があるだろうか。	生徒の読みとりを、最初の課題に関連づける。
B	死を意識した主人公の心理に興味を持った。 ← 主人公の考えや気持ちはこの小説の中でどのように変化したか？	生徒の興味・関心に対しての最初の課題。
	家族の愛情を感じるようになった。 ← 他には？	主人公の心理の読み取りの指示。
	周りの子供をいじめていたことに気づいた。 ← この二つのことに共通するものは？	心理の分析の指示。
	周囲に気を配るようになって，自分がわかった。 ← なぜ，そのように考えるようになったのか？	主人公の変化の読解の指示。
	死を意識したから。 ← 死を意識すれば，みんなこのように考えるだろうか？	解答に対しての問題点の指摘。
	考えない。 ← なぜ，主人公は死を意識することによって、自分を客観的に見るようになったのか？	他の作品内要素へ関連づけることの指示。
	主人公の性格が関係している。 ← 主人公の性格について考えてみよう。	主人公の人物像の読みとりの指示。
C	主人公の性格や対人関係に興味を持った。 ← 主人公は周囲の人と，どのように接していたか？	生徒の興味・関心に対しての最初の課題。
	孤独だった。 ← どんなところからそれがわかるか？	作品内の根拠の読み取りの指示。
	チロに共感を持ったりするところ。 ← チロと主人公の関係はどのようなものか？	チロとの関係性の読み取りの指示。
	チロに噛まれたことを裏切りと思ったが，怒ったりはしなかった。 ← 裏切られたと思った主人公は、その後どのように考えたか？	心理の流れの読み取りの指示。
	共感を否定され，死ぬことになってしまったので，自分を振り返ってみた。 ← なぜ，共感を否定されることが振り返ってみることにつながるのか？	生徒の意見の問題点の指摘。
	裏切られて，今までの共感はなんだったのだろうと振り返ってみた。 ← 振り返ることによって，主人公は変わったか？	主人公の変化の読み取りの指示。
	周囲に優しくなった。 ← 自分を振り返ることと周囲に優しくなることはどのように関係しているだろうか。	論理の関連づけの指示。

生徒の感想★★★

▽ めんどくさかった。　▽ 先生と話してわかったような気がするんだけど，人に言うとうまくいえなくて困った。
▽ 放課後とかに質問しなきゃいけないから大変だった。　▽ 人に教えてたら，あとで違ってたことがわかってあせった。
▽ 最初はどうなるのかわからなかったが，おわりのほうはよかった。　▽ 自分の考えがだんだん深くなっていくような？気がした。
▽ あんまりまじめな話しないから，まじめな話が（友達と）できてよかった。　▽ なんかものを考えたような気がする。
▽ 最初はめんどかったけど，やってるうちにおもしろくなった。けど質問しようとしてもなかなか順番がこなくてこまった。
▽ 人の話ばっかり聞いてたような気がする。だけど，友達からいろんなことを教えてもらったからよかった。

6．評価の観点（事後評価）

①作品の読みとりから，自分の論を組み立てることができたか。

②他の生徒に自分の考えを正確に伝えることができたか。

③意見の交換を通じて自分と他の生徒の考えをお互いに尊重して評価し，論理的にものごとを思考し，判断する能力が身に付いたか。

7．考　　察

＜基礎編＞

作品内容が，日常ありそうな事件でもあり，生徒は皆，授業全般に興味をもち今までになく積極的に取り組んでいた。初読の段階で共感した生徒が多かったが，それを論理的に説明したとき，理解した生徒とわからなくなった（おもしろくなくなった）生徒と，二つに分かれた。そのようなことがどうして起こるのかについて考察すると，論理的に考えることに興味を示す者はより読みを深め，主に感性でとらえようとした生徒はおもしろみを感じなくなったようである。しかし他者の様々な意見には体験を基にした説得力があり，それらの意見を通して作品へアプローチすることは，感性でとらえようとする生徒に，作品への自分とは違った解釈を認識させ，どうしてそのように考えるのかという，ものごと論理的に考えることへの契機となったと思う。今回の授業実践を通して，生徒の自主的な活動を引き出しながら進めていくことの大切さを，改めて学ぶことができた。

＜応用編＞

実際の展開について留意したのは，小説の読解が主になるだけに，生徒の様々な読みとそれに基づく視点をどれだけ各々の論に組み入れ，発展させていくかということであった。そのためには，生徒の考え方の方向を示し，必要な要素を個別に指示することが要求される。しかし，この指示や発問は全く個別というわけではなく，実際には課題を同じくするもの同士の小グループになることが多かった。その中で生徒は意見を交換し，自然に，かつ積極的に討論して意見をまとめていくという形態になっていった。したがって，指導者はグループ内の問題が何であるかを明確にし，また，同じグループ内での話し合いにとどまらないように，他の生徒との意見の交換を必要とするような指示や発問をする必要があった。

前述の指導目標を意図した指導計画を作成・実施するにあたって，生徒自身の感想をもとにして，主体的に課題に取り組み，他者の意見を聞いて参考にしながら思考を深めていくという形態を中心にした。基礎編と応用編の差異は，自分で論を組み立てていくか，ある程度の筋道が与えられているか，というところにあるが，いずれにしても自分自身の課題に取り組んでいくという展開であったため，基礎編，応用編とも，生徒の授業へのより積極的な参加と多様な発展が見られた。しかし，同時にそれは，生徒の様々な意見に対して適切な指示を即答しなければならないことでもあり，指導者の力量が問われることを痛感した。また，内容については，授業前に予想したよりも様々な読解と論理の展開があり，授業後の感想でも自分の考えが深くなっていったことを印象に持つ生徒が多かった。自己評価でも，この授業を通じてより論理的に考えることができるようになったとする生徒が多かったことは，今回の一つの成果ということができよう。

Ⅳ　まとめと今後の課題

目まぐるしく社会が変化する現在，生徒に自己を確立する態度を養わせることは急務である。それにはまず，人格形成の土台である言語文化に注目させ，主体的な言語活動を通じて自己を発見し，個性を伸ばす必要がある。そのためには，生徒にとって身近な題材・テーマを扱うことで興味・関心を喚起し，言語の特性・重要性を理解させつつ，論理的に自らの考えを深めさせることが効果的であると考えた。これらの点を踏まえ，各分野で以下の研究実践を行った。

現代語班　「図の説明」「ラジオの野球中継」「写真の説明」の演習を通して，自らが知覚した事柄を正確に伝えることの難しさを実感させることができた。「サインの依頼」「借金の依頼の断り」「プロポーズの断り」の演習では，様々な状況や相手を設定することによって，意識的に話し方を変えていこうとする工夫が見られた。人間関係の浅い相手や目上の人，あるいは物事を依頼するという場面において，婉曲表現が求められることに気づいた者も多かった。

古典班　「言葉の力」というテーマに沿って，古文と漢文を併せた授業展開とした。有名古典を新たな視点で読むという観点から内容理解に重点を置き，段階的なプリント学習の積み重ねによって，生徒の興味・関心を持続させた。有名作品に触れながら，作者や登場人物の発言・行動について現代との比較考察を加え，現代にも通じる古典世界の人間のありように対する共感を深めた。また，自分たちを取り巻く言語状況を見つめ直す契機とすることができた。

現代文班　「現代小説を読み，人生の転機について考える」というテーマの下で，生徒の子供時代と重なる主人公の行動・心情の読解と生徒相互の意見交換を交互に行う授業展開とした。自己を見つめ直すことを通して自己の人生への認識を深めさせることを目指し，生徒の興味・関心を基に学習の目標を設定し，現在の自分の在り方とその背景（成長過程を含む）を論理的に考察させた。自分が興味をもった問題を中心に取り組ませたため，生徒は積極的に授業に参加し，予想以上に読解・考察が深められた。

今後の課題について，各分野ごとに以下に挙げることにする。

1．現代語班　「音声言語」学習の試みは，小・中学校に比べ高等学校においてはまだ少ないのが現状であろう。学問的なアプローチや裏付けも必要だが，社会を生き抜く力を育てるという観点から，より実践的で主体的な学習態度の育成が求められている。「現代語」という新設の科目を充実，発展させるためにも，今後さらに教材開発（テレビ，ラジオ，日常の対話の録音，録画教材等），指導方法の改善（グループ・ペア学習，ロールプレイング等）に努めたい。

2．古典班　古典世界と現代社会との比較考察では，身近な事象ばかりが採り上げられ，広く社会的視野をもたせにくいことを再認識した。これは国語科ばかりでなく，高等学校教育共通の問題であろう。生徒の知的好奇心に訴え，主体的な学習姿勢を喚起する材料を発掘するという意味で，『三国志演義』の教材化はさらに進められるべきであり，既存教材についても新たな観点からの教材研究が必要である。

3．現代文班　今回の試みは生徒の日常に比較的近い作品を教材としているが，今回のような指導方法を採る場合，評論文教材においては，生徒が自分の生活や体験に置き換えにくいだけに，関心をもって授業に取り組ませることが困難になると考えられる。自分の論理を組み立てる力を身に付けさせると同時に，いかにして興味・関心をもたせ，筆者が伝えたいことを把握する力・相手の論理（思考の過程）を理解する力を身に付けさせるかについて考察を深めたい。